

オープンサイエンス時代における 大学図書館の在り方について

杉田茂樹 <sugita.shigeki.5c@kyoto-u.ac.jp>

京都大学附属図書館事務部長

令和6年10月25日

第65回中国四国地区大学図書館研究集会



Explore the Post-Gutenberg Galaxy

158 回視聴・5 か月前



「きみも大学図書館で働いてみないか」実行委員会

科学情報の流通は、15世紀の活版印刷術発明以来の大きな変化の過程にあり、出版産業や大学・研究機関を揺り動かして...

4K

大学図書館とは

- 一般にイメージされる「図書館」（市や県の図書館）とは似て非
- 機能の本質は、企業の研究開発部の資料室に近い

一般公衆	本や雑誌を読みに行く (知識を消費する)	公共図書館≡ 読者のための図書館
研究者・学生	論文やレポートを書くために、 先行研究をチェックしに行く (知識を生産する)	大学図書館≡ 著者のための図書館

業界動向に関する情報源

- ブログ
 - <https://scholarlykitchen.sspnet.org/>
- メールングリスト
 - LIBLICENSE
 - <https://liblicense.crl.edu/>
 - Opencafe-I
 - <https://listserv.byu.edu/cgi-bin/wa?SUBED1=OpenCafe-I&A=1>

政策動向に関する情報源

- 文部科学省
 - 我が国の学術情報流通における課題への対応について（審議まとめ） R3.2
 - 科学技術・学術審議会情報委員会ジャーナル問題検討部会
 - https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu29/001/mext_00650.html
 - オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について（審議のまとめ） R5.1
 - 同 オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会
 - https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu29/004/mext_00001.html
 - オープンサイエンスの時代にふさわしい「デジタル・ライブラリー」の実現に向けて：2030年に向けた大学図書館のロードマップ R6.7
 - 「2030 デジタル・ライブラリー」推進に関する検討会（研究振興局長私的諮問機関）
 - https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shinkou/071/mext_00002.html
- 内閣府 総合科学技術・イノベーション会議(CSTI)
 - 第6期科学技術・イノベーション基本計画 (R3.3)
 - <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index6.html>
 - 学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針 (R6.2)
 - https://www8.cao.go.jp/cstp/oa_240216.pdf

「2030デジタル・ライブラリー」推進に関する検討会(第5回)の開催について【オンライン会議】

令和6年2月26日
文部科学省

標記の会議を下記の要領で開催いたします。

1. 日時

令和6年3月4日(月曜日)15時00分～17時00分

2. 場所

文部科学省 東館17F1会議室 ※オンライン会議にて開催

3. 議題

1. 新しい「デジタル・ライブラリー」の在り方について
2. その他

4. 傍聴・取材

- 傍聴を希望される方は、3月1日(金曜日)13時までに、会議傍聴登録フォームから、氏名、所属及びメールアドレスを御登録ください。
- 会議の撮影、録画、録音をされる場合には、会議傍聴登録フォームの備考欄にてお知らせください。
- 都合により、人数を制限させていただく場合があります。
- 会議資料及び接続方法等の詳細につきましては、御登録のメールアドレスへ御連絡いたします。
- 傍聴者は発言等できません。また、通信状況により中断の可能性がありますので御承知おきください。

傍聴を希望される方は、3月1日(金曜日)13時までに、会議傍聴登録フォームから、氏名、所属及びメールアドレスを御登録ください。

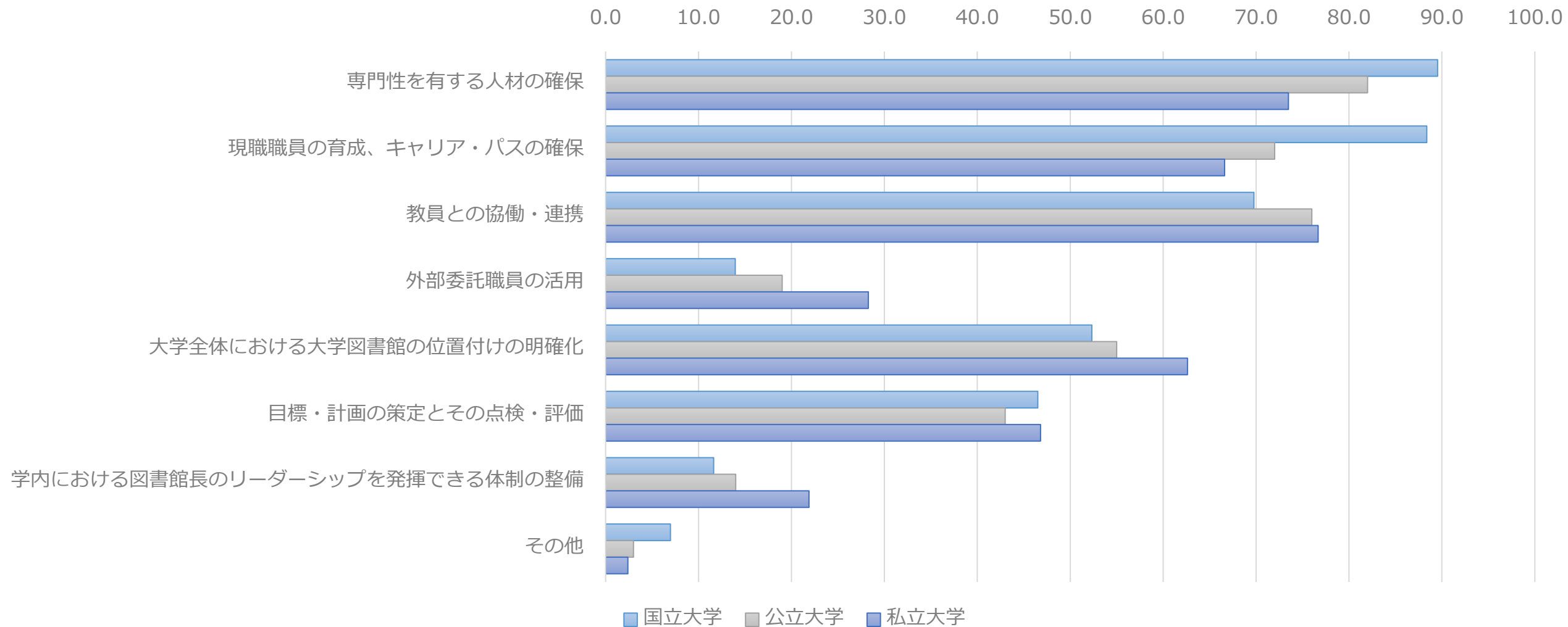
本日の内容

- 現状と課題：概観
- 政策動向
 - オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について
 - オープンサイエンスの時代にふさわしい「デジタル・ライブラリー」の実現に向けて～2030年に向けた大学図書館のロードマップ～
 - 学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針
- オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について

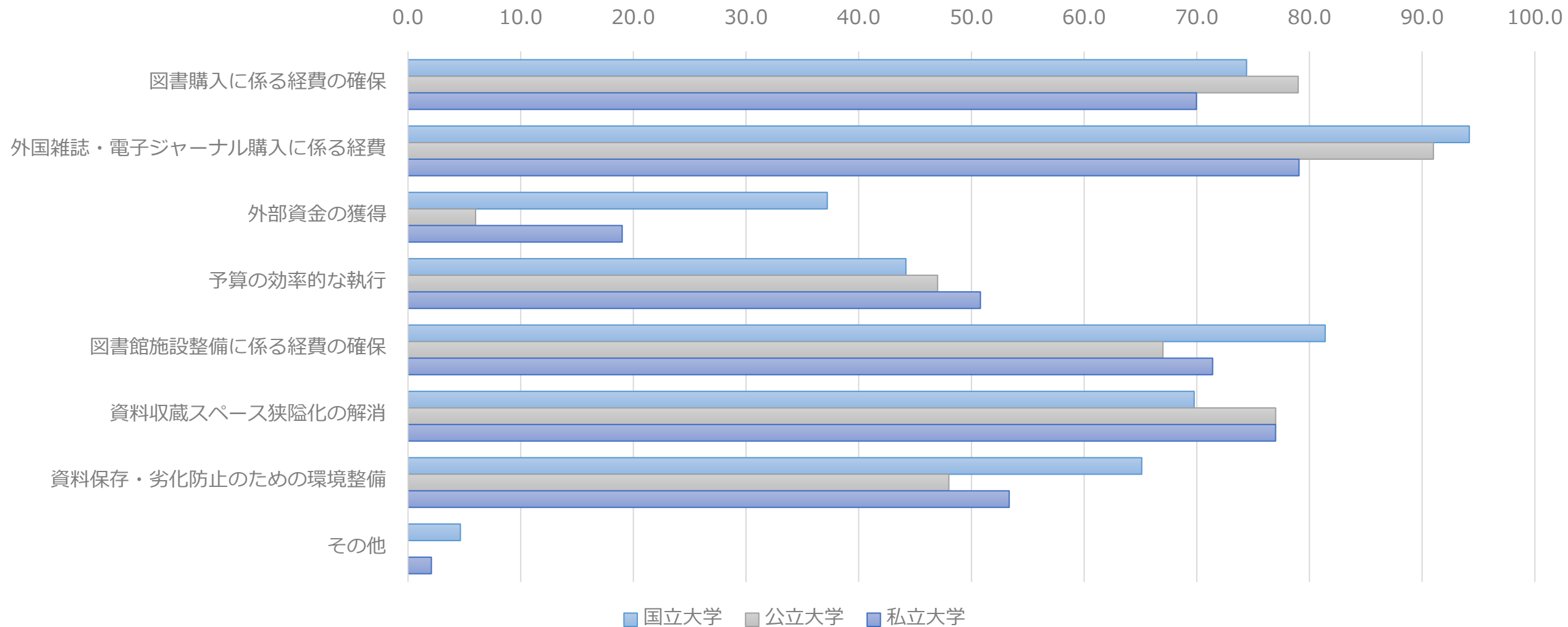
現状と課題：概観

- 学術情報基盤実態調査 大学図書館編
 - 国公立大学を対象に、大学の教育・研究活動を支える学術情報基盤についての現状を明らかにし、その改善の基礎資料とすることを目的として毎年実施（悉皆調査）
 - 大学図書館の管理運営等において、解決すべき課題のうち、重要と考えているものを、以下の1～5についてそれぞれ回答してください。
 1. 組織・運営面
 2. 経費・設備面
 3. 機能面
 4. 外国雑誌及び電子ジャーナル
 5. 機関リポジトリ

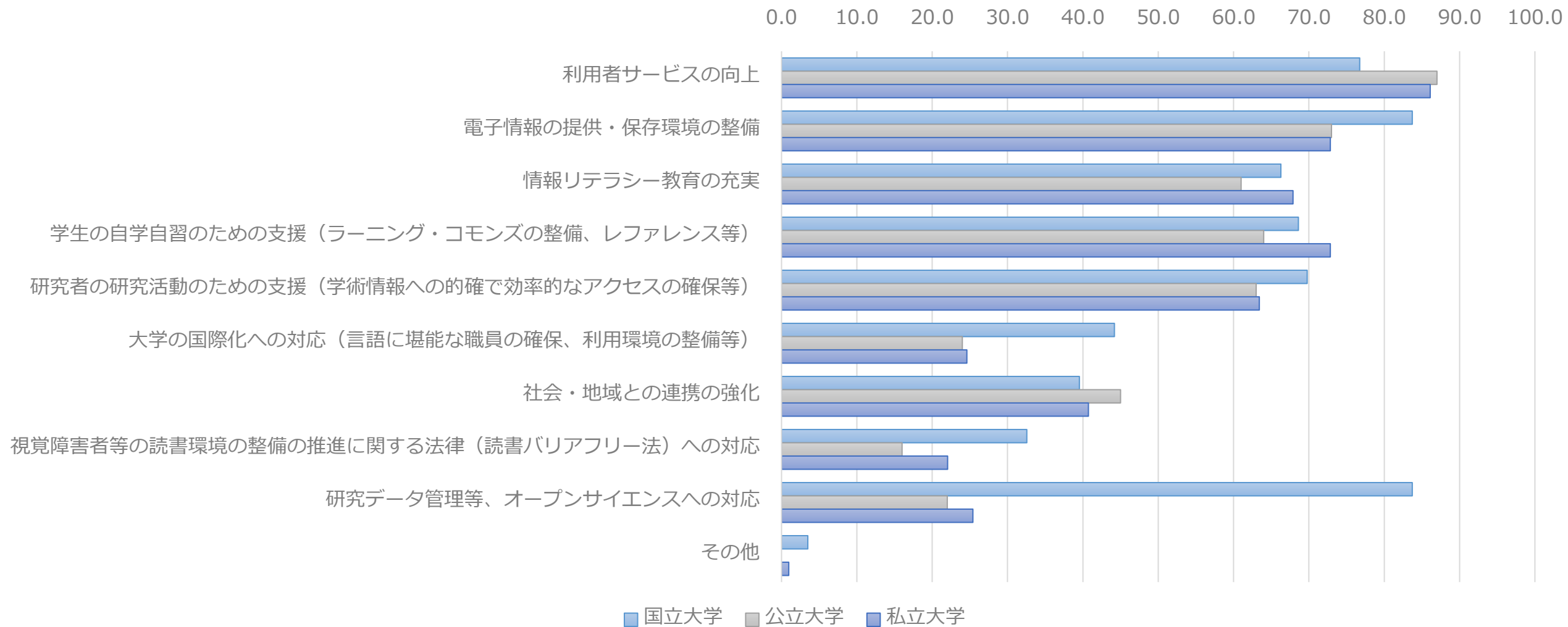
① 組織・運営面の課題



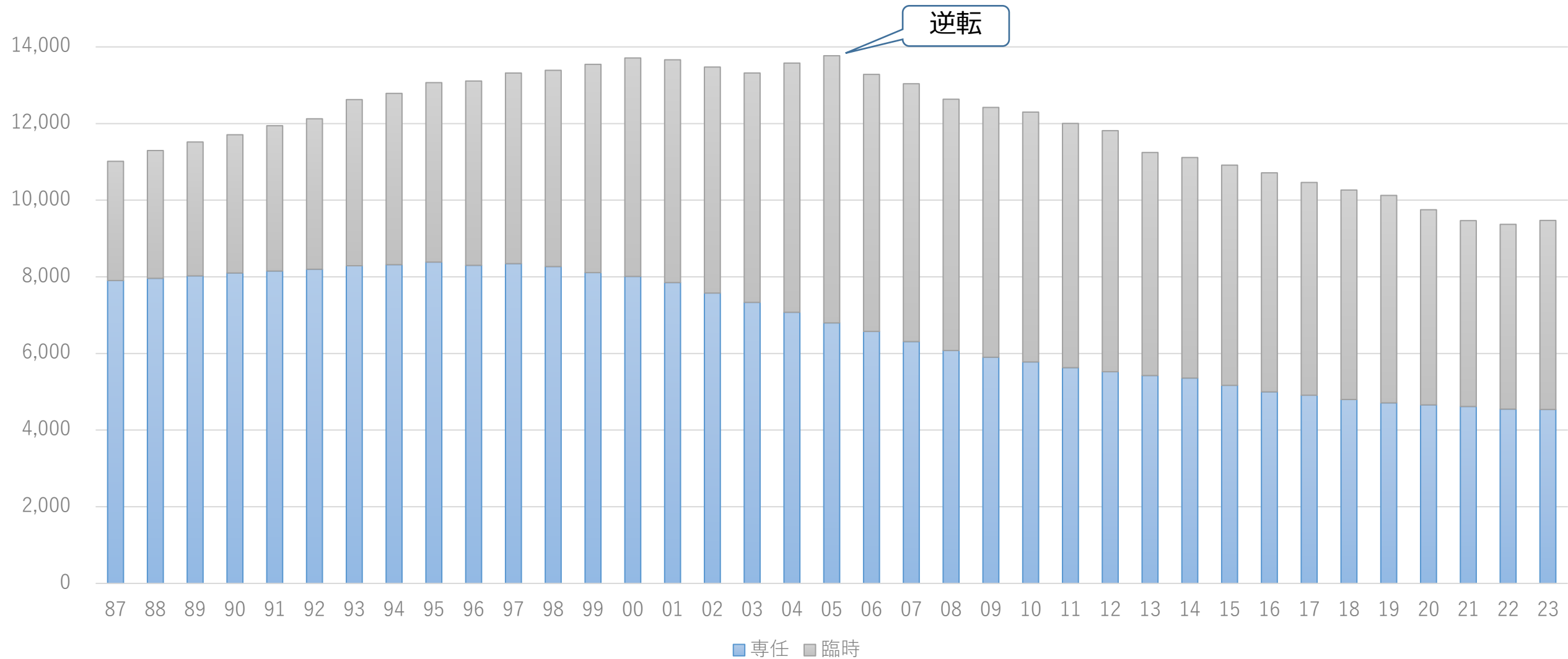
②経費・設備面の課題



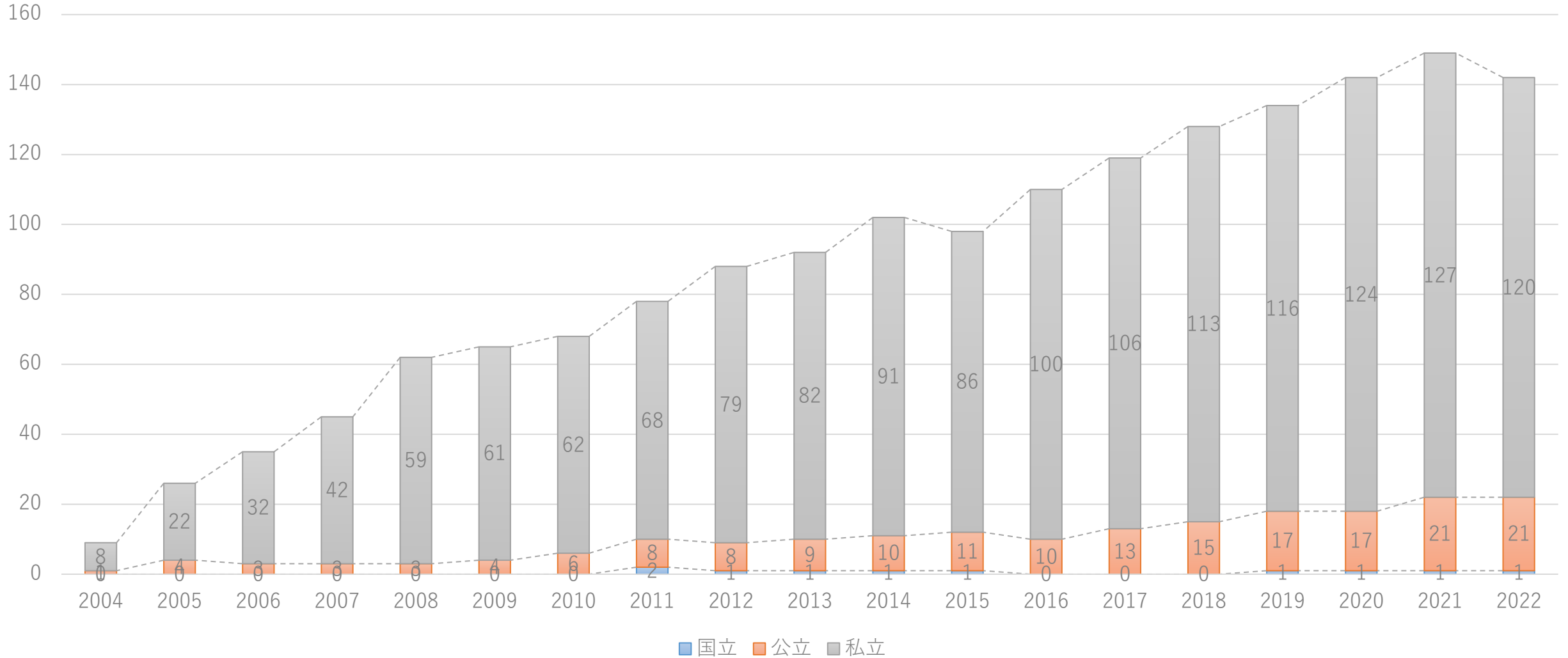
③機能面の課題



大学図書館職員数の推移（国公私全体）

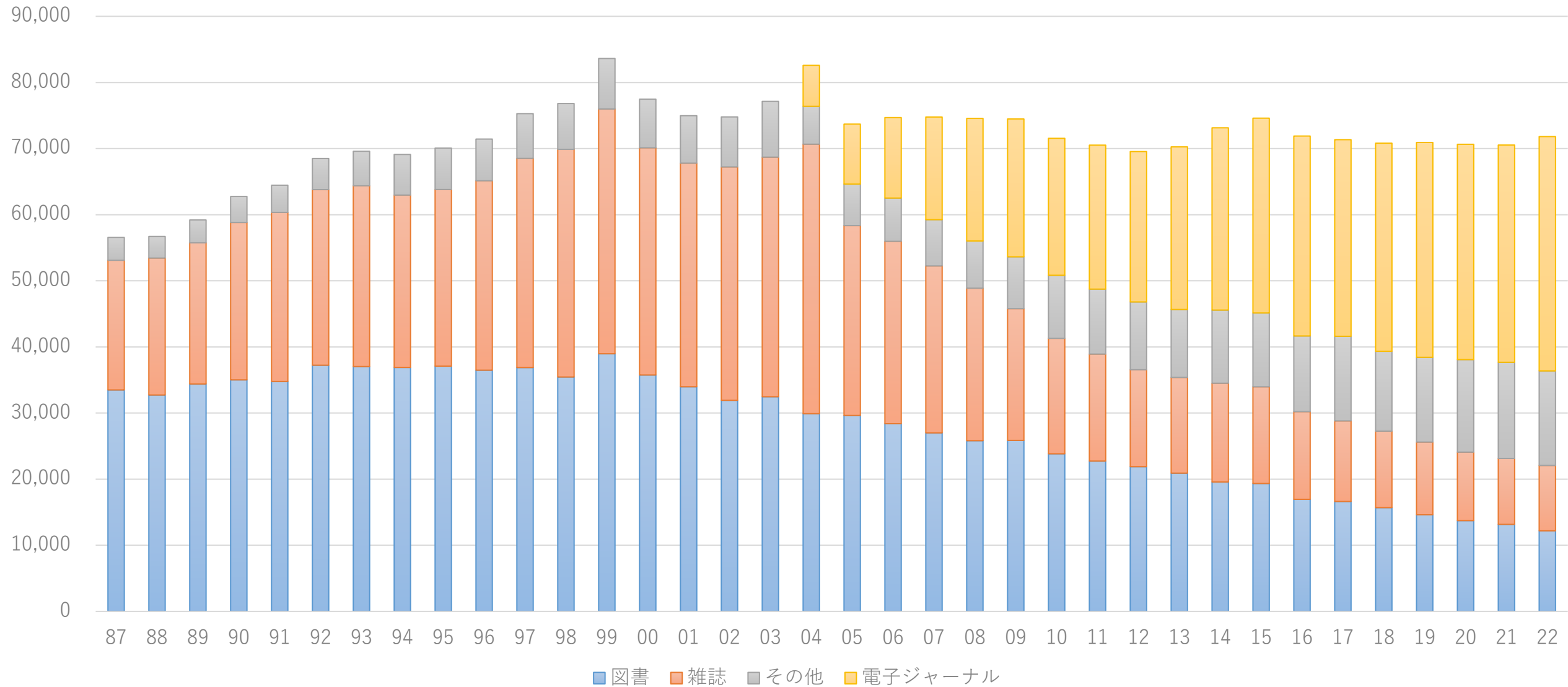


全面業務委託の推移



資料費の推移

単位：百万円



「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について（審議のまとめ）」

- 文部科学省科学技術・学術審議会情報委員会オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会（令和5年1月25日）
- デジタル・トランスフォーメーションが大学図書館の在り方に影響
 - 研究面：研究のライフサイクルを理解し、研究者とともに研究を推進
 - 教育面：利用者の環境を踏まえた最適な形態での教育・学習リソース提供
 - 大学の教育・研究推進体制全体の中での位置付けや役割を意識
- 「デジタル・ライブラリー」として大学の様々な活動を支援
 - 「電子図書館」構想（1990年代）を更に進め、コンテンツのデジタル化を踏まえて運営やサービス、職員の知識やスキルを変革
 - 次期科学技術・イノベーション基本計画が終了する 2030 年度を目途に実現

今後の大学図書館に求められる教育・研究支援機能や新たなサービスについて

- 大学図書館は、今後の教育・研究における利用に適した形式で**既存のコンテンツのデジタル化**と、学術研究等の成果として**今後産み出されるコンテンツのオープン化**を進める。また、デジタル化されたコンテンツの利活用を支援する様々なサービスと現行業務について、利用者志向の立場から再構築する。さらに、大学図書館間あるいは他の学術情報提供機関と協働することにより我が国の学術情報の集積、デジタル化及び学術情報の流通を促進する。
- 日本語蔵書のデジタル化にあたっては、国立国会図書館の蔵書のデジタル化を中核に、各大学図書館等がこれとは重複しないよう留意しつつデジタル化を進め、それらへのアクセス環境を最適化することにより**全国規模のデジタル・アーカイブ基盤**を構築する。
- オープンアクセスへの対応に関しては、各大学図書館は、引き続き、**機関リポジトリ等を通じた学術論文等のオープン化**を積極的に推進するとともに、永続的に公開できるよう適切な対応に努める。
- **研究データのオープン化**に関しては、各大学図書館は、関係部署と連携・協力しながら、公開されている研究データの発見可能性を高める方策を検討・実行する。また、**研究の開始から成果公表に至るまでのプロセス全体（研究のライフサイクル）**を視野に入れた大学全体の研究推進体制や教育のデジタル化の動向とも連動しながら、大学図書館の役割を明確にし、利用者志向の取組を行う。

2. 上記支援機能やサービスを実現するための、情報科学技術及び「場」としての大学図書館の効果的な活用について

- 「デジタル・ライブラリー」の実現には、大学図書館機能を物理的な「場」に制約されない形で再定義することが求められる。そのためには、**「ライブラリー・スキーマ」**を明確にした上で、利用者が何を求めているかを整理・再検討し、それを反映してデザインされた最適な環境を構築する必要がある。
- その際、学修環境整備に関する既存業務のうち、主に大学図書館が担ってきた部分については、これまでの活動の評価を踏まえ、**大学図書館が引き続き行うかどうか改めて整理する等、大学全体で検討**する。

3. 上記機能やサービスの実現に求められる人材について

- 「デジタル・ライブラリー」を実現する上で**大学図書館職員に求められる知識やスキルについて整理・検討**する。それに応じ、大学図書館職員の専門資格として新たな認定制度の構築や、既存の履修プログラムの活用等を進め、専門職としての能力開発の促進、新たなキャリアパスの形成など、構造的な課題を解消する組織体制や制度を構築する。
- そのなかでも、大学図書館職員は、これまでの業務に加え、研究データの管理にも携わることになるため、大学における学問の在り方や研究のライフサイクルを理解することが不可欠であり、その中で自らが行う支援がどのような機能として位置付けられるか認識し、適切にそれを行っていく。
- 今後の大学図書館の役割を明確にし、それに基づく**業務の再構築**の考え方を踏まえ、各大学は、大学全体における人的資源配分の見直しや教育・研究推進体制の構築等と連動する形で、大学図書館に専門人材を配置できるよう組織体制と人的資源配分を見直す。

4. 大学図書館間の効果的な連携について

- 「デジタル・ライブラリー」の実現の際に直面する各課題の解決に向け、**「一大学一図書館」という前提にとらわれず**、例えば、複数の大学図書館で「コンソーシアム」を形成するなど、相互運用の観点から連携して対応する。
- 「デジタル・ライブラリー」構想を実現する過程で、今後新たに生じる共通の課題等を検討する場を国において設置し、新たな支援方策等を検討する。

京都大学附属図書館、大阪大学附属図書館及び神戸大学附属図書館の連携・協力活動に係る協定書（抄）

京都大学附属図書館、大阪大学附属図書館及び神戸大学附属図書館（以下「三館」という。）は、新たな大学図書館機能の実現に向けて連携・協力して取り組むため、以下のとおり協定を締結する。

（目的）

第1条 本協定は、三館が連携・協力し、オープンサイエンス時代に即した大学図書館機能を創出・展開するための活動を行うことで、三館のみならず国内大学図書館の充実・活性化に寄与することを目的とする。

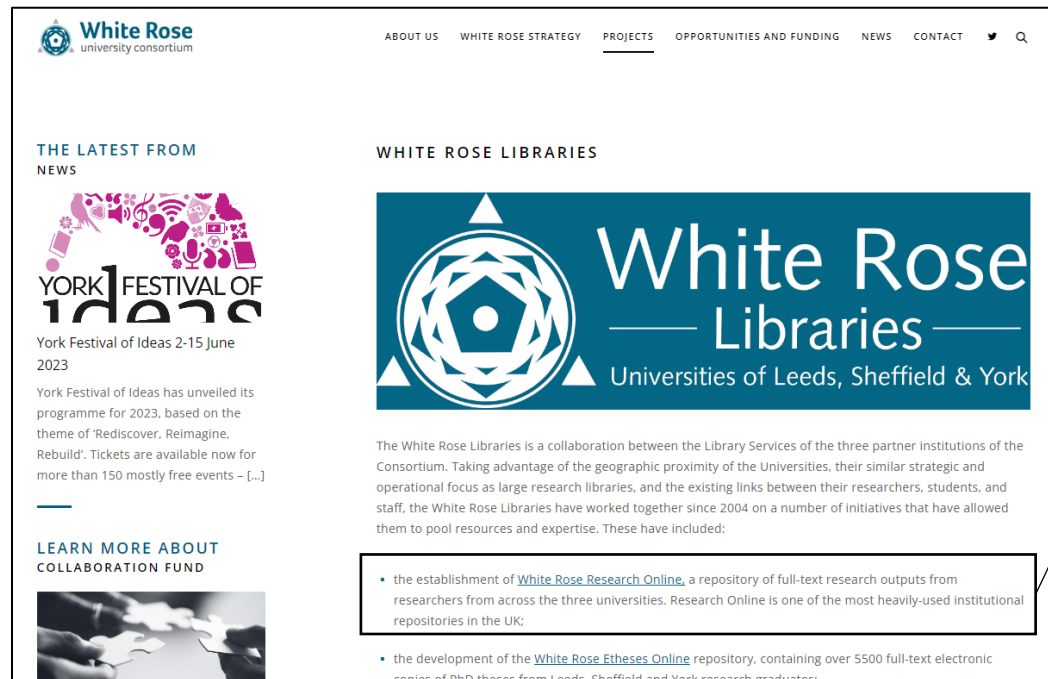
（連携・協力の内容）

第2条 三館は、前条の目的を達成するため、以下の事項について連携・協力する。

- 一 学術情報資源の確保に関すること ≡電子ジャーナル関連
- 二 学術情報資源の創出に関すること ≡デジタルアーカイブ関連
- 三 研究成果発信の支援に関すること ≡機関リポジトリ関連
- 四 その他、三館が必要と認めること

連携のモデルイメージ

- 英国ホワイトローズコンソーシアム
(リーズ大学、シェフィールド大学、ヨーク大学)



The establishment of White Rose Research Online, a repository of full-text research outputs from researchers from across the three universities. ...

コンソーシアムとして共同機関リポジトリを運営。リーズ大学に専門スキルを有するリポジトリ管理者を置き、シェフィールドやヨークの研究者に対しては、先方大学のサブジェクトライブラリアンに同行してもらってコミュニケーションにあたっている（数年前に訪問し聴取）

コンセプト

- プロジェクトではなく友好協力協定
- 何をするかをあらかじめ決めない。連携そのものが目的
- 業務ごとの担当係同士が、まるで隣にいるかのように知恵を出し合える環境づくり、関係づくり
- 各々が似たようなことを進める必要があるとき、独力でまぢまぢにやるよりも協働、分担、流用（文殊の知恵＋省力化）

同じ業務を行う者同士を接続

3館長ネットワークによる統括
幹事会：3部長、担当者会：担当3課長

太枠 はテーマごとの幹事役大学

学術情報資源の確保

電子ジャーナル契約（オープンアクセス包括契約を含む）に係る調査・研究・開発を協働して行う。

学術情報資源の創出

図書館資料等のデジタルアーカイブ化に係る調査・研究・開発を協働して行う。

研究成果発信の支援

機関リポジトリのコンテンツ増進（研究データ管理・公開支援を含む）に係る調査・研究・開発を協働して行う。

京都大学図書館機構・附図

総務課	総務掛
	経理掛
研究支援課	研究支援第一掛
	研究支援第二掛
	研究支援第三掛
	システム管理掛
利用支援課	情報企画掛
	情報管理掛
	情報サービス掛
	宇治地区図書掛
各部局図書館室	各部局図書担当掛

大阪大学附属図書館

図書館企画課	企画係
	庶務係
	会計係
学術情報整備課	学術情報収集班
	学術情報組織化班
図書館サービス課	フロアサービス班
	情報ナビゲート班
	生命科学図書館班
	理工学図書館班
箕面図書館課	外国学図書館班

神戸大学附属図書館

情報管理課	企画係
	管理係
	資料整備G（受入）
	資料整備G（雑誌）
	資料整備G（目録）
	資料整備G（整備）
	電子情報G（電子図書館）
	電子情報G（震災文庫）
	電子情報G（システム管理）
情報サービス課	各系図書館情報サービス係
	情報リテラシー係

研究支援第一掛

研究支援第二掛

研究支援第三掛

学術情報収集班

学術情報組織化班

資料整備G（雑誌）

資料整備G（目録）

資料整備G（整備）

電子情報G（電子図書館）

電子情報G（震災文庫）

電子情報G（システム管理）

各系図書館情報サービス係

情報リテラシー係

ミニマムなスタート

- オンラインの顔合わせ会
- なんでも書き込み可のコミュニケーションツール設置
 - 「こんな記事が出てたよ」
 - 「〇〇という調査が来たね。こちらではこう答えるつもり」
 - 「利用者アンケート、比べ易いように項目揃えてやらない？」
 - 「転換契約の著者負担方式について〇〇や〇〇をどうしてる？」
 - 「〇〇の不具合について〇〇に質問したら、こういう事情みたい」
 - 「インボイス制度にどう対応する？」
 - 「DataCite DOI登録が有料化されるみたいだけど」
- 後日、プロジェクト的活動2点に着手

「ライブラリー・スキーマ」

教育・研究のDXが進展する中、今後の大学図書館には、物理的な「場」に制約されることなく大学図書館機能を再定義し、それに沿ってサービスを実現することが求められている。例えば、教育では「いつでも、どこでも、誰とでも」という教育や学習スタイルへの変容が想定されるが、その中で情報へのアクセスという観点から教員や学生がそれぞれどのような情報利用空間を必要とするかについての整理・再検討が必要となる。その前提として、様々な利用者に適した図書館のサービスをデザインするために必要な、**自らの存在を規定する基本的な論理構造としての「ライブラリー・スキーマ」**を明確にする必要がある。「ライブラリー・スキーマ」が実際にどのように見えるかは、研究あるいは教育の文脈、分野や立場（教員か学生かなど）によって異なっており、特に今後、仮想的な空間において大学図書館機能の実現を図る際には、その点に十分な留意が必要である。将来的には、利用者の立場ごとに異なる仮想空間（メタバース）を設けて、「ライブラリー・スキーマ」と接続することが想定される。

京阪神3大学図書館 ライブラリー・スキーマ

- 「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について（審議のまとめ）」（2023年1月）で提案された「ライブラリー・スキーマ」の京阪神版を作成
 - 大学図書館の在り方を本質に遡り自己規定する
 - 3大学図書館の連携協力活動に理論的土台を与える
 - 何を拠り所として業務を行っているのか、また何を行うべきなのかを考える材料となることを期す
- 縦軸：大学・大学図書館の本質的機能、現代の文脈における役割
- 横軸：研究者や学生など利用者のニーズの例示
 - 両者が交差する点に具体的な業務や設備を位置付け

事例 神3大学図書館 ライブラリー・スキーマ

利用者のニーズ

研究者



1. 自分の研究活動と教育活動に必要なデータ・情報をもれなく手に入れたい
2. 研究費（外部資金）を獲得したい
3. 研究時間を確保したい
4. 研究成果（論文）を多くの人に読んでほしい
5. 研究成果を挙げたい
6. etc...

学生



1. 幅広い分野の知識を身に着けたい
2. 専門分野の知識を深く探求したい
3. 学修・研究活動の成果を正しく発表したい
4. 勉学のための場が欲しい
5. etc...

etc.
職員
学外者
等々...



研究を

本質的機能

役割

大学

図書館

▼ 創出する

スケール：一人の人間が実現可能な範囲を超えて研究の規模を拡大する

研究の発展のために、**データ・情報やそれらのアクセス環境を整備して提供する**

研究者が必要とするデータ・情報に漏れなく効率的にアクセスできる環境を整える。研究者がデータ・情報を活用するための環境を整備する。

コミュニティ：研究者間の連携・共同活動を推進する

研究者の連携や共同活動を推進するために、**環境を整備する**

研究者が他の研究者とともに研究活動ができる場を提供する。研究者が他の研究者とともに研究活動を容易かつ安全にできる仕組みを提供する。健全かつ公正な学術コミュニケーションを支援する。

▼ 継承する

人材：次世代を担う資質を備えた人材を育成する

次世代を担う資質を備えた人材を育成するために、**環境を整備する**

次世代を担う資質を備えた人材を育成するために必要なデータ・情報、環境を整備して提供する。

成果：研究を蓄積し、次世代に継承する

研究活動に伴い生成される**データ・情報を蓄積し、次世代に継承する**

研究の方法、研究活動の過程で生み出されたデータ・情報を保存し、必要に応じてアクセスできるように整備する。

▼ 発信する

社会貢献：大学が生み出す知識・技術・人材を通して社会に貢献する

教育・研究活動の過程で生み出された/**蓄積されたデータ・情報を活用して、社会に貢献する**

収集したコレクション、研究成果等を一般の人々が障壁なくアクセスできるように整備し公開する。

※横軸（本質的機能、役割）と縦軸（利用者のニーズ）を合わせて、具体的な業務や設備を導く。

オープンサイエンス時代にふさわしい「デジタル・ライブラリー」の実現に向けて： 2030年に向けた大学図書館のロードマップ

- 「デジタル・ライブラリー」の実現に向けた当面の目標である「2030年の大学図書館の望ましい姿」を具体的に描き、「実現に向けた課題」を整理
- 大学図書館のみならず、国、大学、大学図書館関係団体等が目標の達成に向けて、何に取り組み、段階的に何を実現していくべきかをロードマップ化
- 優先的に取り組むべき領域
 1. 支援機能・サービス：支援・サービスの基盤としての「コンテンツのデジタル化」と「オープンアクセス」
 2. 場：「ライブラリー・スキーマ」に基づく機能の具体化
 3. 人材：求められる「スキル・育成」とそのための「制度」

「2030デジタル・ライブラリー」推進に向けたロードマップ

2024年7月1日
「2030デジタル・ライブラリー」推進に関する検討会

第6期科学技術・イノベーション基本計画

即時OA義務化

第7期科学技術・イノベーション基本計画

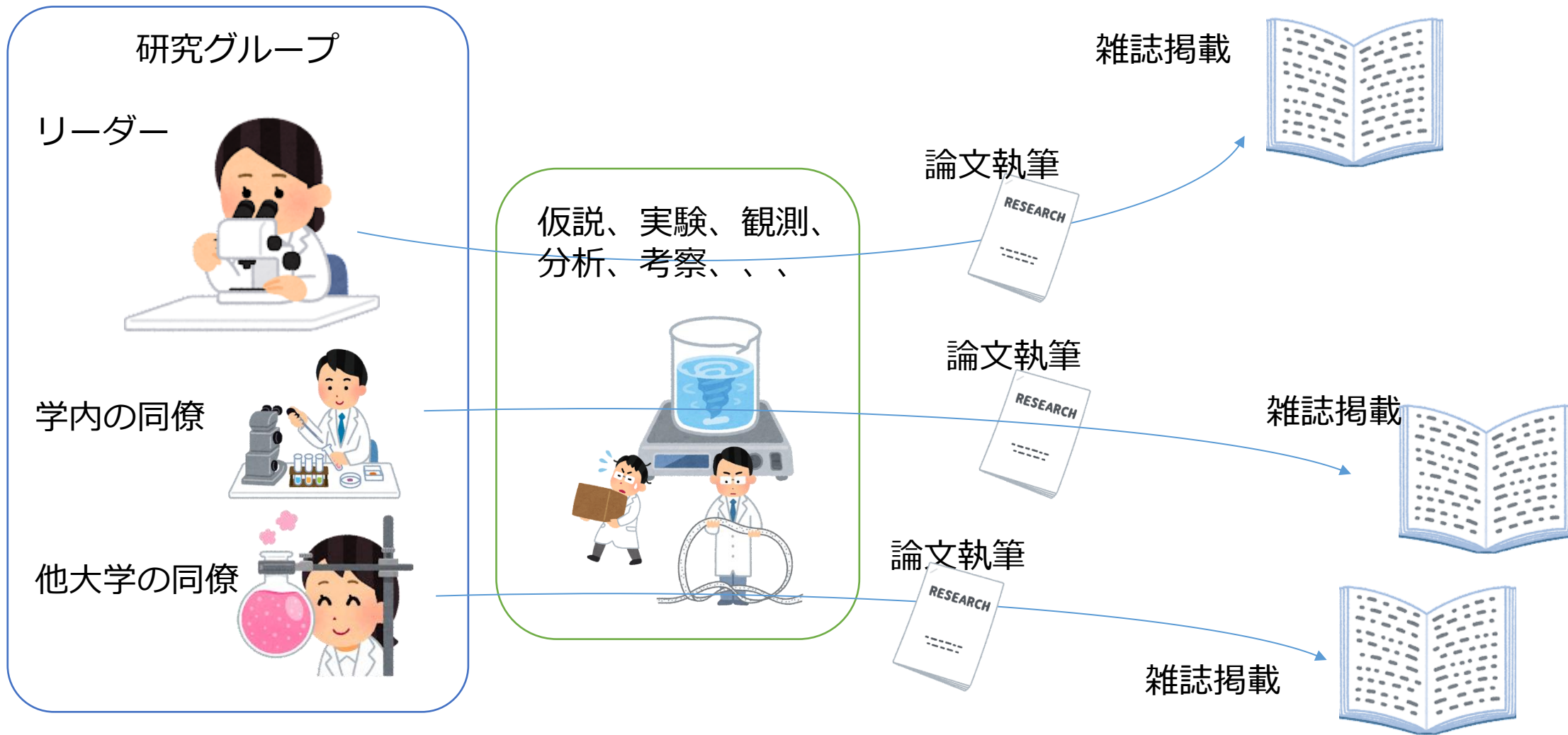
	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030年の望ましい大学図書館
【1】支援機能・サービス	調査 ・既存資料のデジタル化推進体制・支援・出版の事例調査 ・DDS/ILL等も含めた海外の大学図書館等における資料提供の実態 ・コピーライトライブラリアン ・コロナ前後での大学図書館の機能の変化 ・既存実施調査のリヴァイズ	整理・検討 ・学術書のデジタル出版活動のモデルの検討 ・デジタルコンテンツの利活用に関わる権利（OAに関する権利、知財としての研究データの権利・ライセンス等）に詳しい専門人材の配置 整理・検討【関連団体・組織等】 ・国立国会図書館と大学図書館との連携方策の検討 ・複数館連携によるコンテンツ提供体制の検討		実証研究・試行 ・国立国会図書館と大学図書館との連携モデル（コンテンツ収集体制等） ・大学出版者等と大学図書館協働の学術書のデジタル出版活動のモデル ・デジタルコンテンツの利活用に関わる権利に詳しい専門人材の配置		展開・拡張実装	○各機関が公開しているデジタルコンテンツを、利用者がいつでもどこでもシームレスに利用できる統合的な利用環境の実現。 ○研究者のニーズに沿った大学全体の支援体制を構築し、メタデータ付与やデータ公開の支援体制を整備 ○オープンアードクローズド戦略に基づく研究データの管理・公開・共有が実現。
	オープンアクセス ・即時OA義務化対応（OAポリシーの策定・改訂、機関リポジトリ機能強化、学内支援体制） ・研究データポリシー管理体制の整備（研究データポリシーの策定・改訂、学内支援体制） ・即時OA義務対象外コンテンツのOA化方策の検討 調査 ・海外のOA推進の施策 ・既存学術情報流通に関するシステムの連携状況調査 ・既存実施調査のリヴァイズ	継続・促進 ・一定水準のメタデータ付与の実施体制整備の検討 ・国際的なシステムとの連携や多様な識別子との紐づけ等高度な研究データ検索システムの開発・実働		実証研究・試行 ・新たな情報科学技術（AI等）を活用した、自動収集・自動検索システムを搭載したプラットフォームの開発と試験運用（閲覧・目録システム、OA、研究データ管理・公開等）			
【2】場	調査 ・国内ステークホルダー実態調査（利用行動、ニーズ、コロナ前後での行動変容等） ・海外大学図書館の教育・研究支援におけるデジタル技術の実態事例調査 ・既存実施調査のリヴァイズ 調査・整理・検討【関連団体・組織等】 ・ライブラリー・スキーマの検討と共有、実装に向けた検討 ・利用者の行動変容やニーズに関する調査	整理・検討 ・2030年のペルソナ像の検討 ・利用者がその機能を十分に活用できる情報システム環境や学習環境についての整理・検討 ・キャンパス全体の学習環境の再設計の検討		実証実験・試行 ・ライブラリー・スキーマに基づく、オンラインツール等を活用した複数館連携によるサービス体制の実証実験 ・オンラインツールやAI等の新たな情報科学技術の活用・応用により、リアルとバーチャルのハイブリッドな学修環境や、個々の利用者に応じて高度に最適化した環境の整備と試行		展開・拡張実装	○各大学図書館自らの存在を規定する基本的な論理構造としての「ライブラリー・スキーマ」に基づいたシステム開発がなされ、各利用者のニーズに即した仮想空間を設定。 ○大学図書館が物理的な場の域を超え、学内のいたるところへコンテンツを提供できる環境が大学全体でデザイン・整備。
	調査 ・求められるスキルや専門性とその養成（海外事例） ・大学図書館職員に求められるスキルに関する既存調査の整理 ・既存実施調査のリヴァイズ 調査・整理・検討【関連団体・組織等】 ・既存の大学図書館職員研修制度に関する整理・検討	整理・検討 ・海外事例の整理（スキル） ・リカレント教育の環境・支援制度整備に向けた内容や実施体制 ・研究のライフサイクルと研究者の作業フローの見える化		試行 ・最新の学術研究の動向を踏まえ、既存の研修制度やプログラムを活用したリカレント教育の実施と改善 実証実験 ・クロスアポイント制度等を活用した、一大学一図書館に閉じない形態での専門人材活用モデルの試行 ・研究のライフサイクル等の基礎的な知識を把握・理解している大学図書館職員がサービスの受け手に近い距離でのサービス提供体制の構築と試行			
【3】人材	調査 ・専門人材の採用制度とキャリアパス（海外事例） ・「ジョブ型」職制の実例 ・既存実施調査のリヴァイズ 調査・整理・検討【関連団体・組織等】 ・国公立大学図書館の人事制度：現状と課題 ・効果的な人事交流の在り方について検討	整理・検討 ・海外事例の整理と実装可能性の検討（人事制度） ・現行の国内制度の把握と整理				展開・拡張実装	○専門人材の新規雇用、複数館での業務従事が可能な、より多様な人材確保と配置ができる柔軟な制度を整備。 ○図書館機能の高度化・効率化により、従来業務の省力化がなされ、より専門的な教育研究の支援業務に従事。 ○専門人材の業務の評価が適切に行われ、最終的に大学全体のマネジメント業務にも従事できるようなキャリアパス制度を確立。

学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針（令6.2）

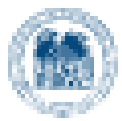
- (1) 公的資金による学術論文等の即時オープンアクセスの実施
 - 公的資金のうち2025年度から新たに公募を行う即時オープンアクセスの対象となる競争的研究費を受給する者（法人を含む）に対し、該当する競争的研究費による学術論文及び根拠データの学術雑誌への掲載後、即時に機関リポジトリ等の情報基盤への掲載を義務づける。
 - 即時オープンアクセスの対象となる競争的研究費制度は、学術論文を主たる成果とするものとし、関係府省が定める。
- (以下略)

- 科研費（学振）
- 戦略的創造研究推進事業（JST）
- 創発的研究支援事業（JST）
- 戦略的創造研究推進事業（AMED）
（関係府省申し合わせより）

研究活動



↓ 以下、科研費を例に



JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE
日本学術振興会

科研費
KAKENHI

申請



受給



成果報告



研究組織

研究代表者



学内の
研究分担者



他大学
研究分担者



仮説、実験、観測、
分析、考察、



雑誌掲載



論文執筆



論文執筆



雑誌掲載

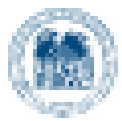


論文執筆



雑誌掲載





JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE
日本学術振興会

科研費
KAKENHI

科研費を受給した研究者は、研究成果をオープンアクセス化（無料オンライン公開）するように！

申請



受給



成果報告



研究組織

研究代表者



学内の研究分担者



他大学研究分担者



仮説、実験、観測、
分析、考察、



論文執筆



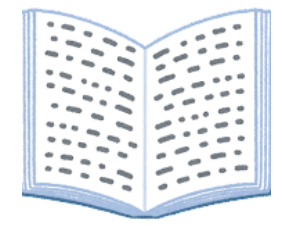
論文執筆



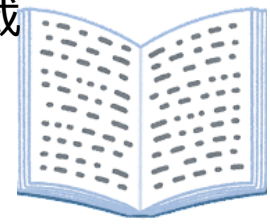
論文執筆



雑誌掲載

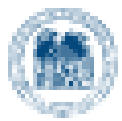


雑誌掲載



雑誌掲載





JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE
日本学術振興会

科研費
KAKENHI

科研費を受給した研究者は、研究成果をオープンアクセス化（無料オンライン公開）するように！

申請 ↑

受給 ↓

成果報告 ↑

研究組織

研究代表者



学内の研究分担者



他大学研究分担者



仮説、実験、観測、
分析、考察、



論文執筆



NG!

雑誌掲載



有料雑誌

論文執筆



NG!

雑誌掲載



有料雑誌
(ただしAPCを払えば無料公開できる)

論文執筆

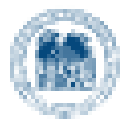


OK!

雑誌掲載



無料雑誌
(OA誌)



JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE
日本学術振興会

科研費
KAKENHI

科研費を受給した研究者は、研究成果をオープンアクセス化（無料オンライン公開）するように！

申請



受給



成果報告



研究組織

研究代表者



学内の研究分担者



他大学研究分担者



仮説、実験、観測、分析、考察、



論文執筆



論文執筆



論文執筆

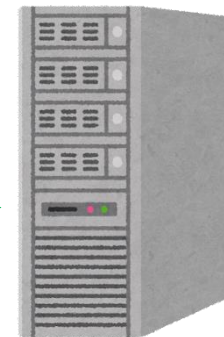


雑誌掲載

有料雑誌



機関リポジトリ



OK!

OK!

雑誌掲載



有料雑誌
(ただしAPCを払えば無料公開できる)

OK!

OK!

雑誌掲載



無料雑誌
(OA誌)

OR



FRENCH STUDIES



Issues

More Content ▾

Publish ▾

Purchase

Alerts

About ▾



Latest Issue

Volume 78, Issue 2

April 2024

About the journal

French Studies is published on behalf of the [Society for French Studies](#). The journal publishes articles and reviews spanning all areas of the subject, including language and linguistics (historical and contemporary), all periods and aspects of literature in France and the French-speaking world, thought and the history of ideas, cultural studies, film, and critical theory.

[Find out more](#)



Advertisement

Editors Martin Crowley Catherine Emerson Emma Gilby Joseph Harris



OUP's options for publishing open access in journals include:

- **Fully open access**

- Articles published in fully OA journals are available to all; no subscription is required. OUP's fully OA journals use Creative Commons licenses and there is usually an Article Processing Charge (APC) for OA publication.

- **Hybrid open access**

- Hybrid journals include a mix of open access articles and articles available to those with a journal subscription.
- Hybrid journals offer authors the option of gold open access publishing. With gold open access, authors usually pay an APC to make their research articles available immediately upon publication, under a Creative Commons licence with re-use rights for readers.
- For articles published under a Creative Commons licence, readers can re-use the work under the terms of the applicable licence.

- **'Read and Publish' transformative agreements**

- OUP has agreements with many institutions to provide access to OUP journals for faculty and students and provide funding for open access publishing for affiliated researchers. Find out which institutions are participating, and how to take advantage of [available funding for publishing in an OUP journal](#).

- **Green open access and self-archiving**

- OUP has self-archiving policies that permit authors to take advantage of green open access by depositing their accepted manuscript (i.e. the post-acceptance version, before copyediting) into a non-commercial repository. In non-commercial repositories, articles can become freely available after the proscribed embargo period. Find out more about [OUP green OA for journals](#).



OUP's options for publishing open access in journals include:

- **Fully open access**

- Article-level open access (Full OA) is available for all OUP journals. Full OA means that all articles in a journal are available to all readers, without the need for a journal subscription. **全論文がオープンアクセス（購読契約が不要）。必ずAPC支払が必要**

- **Hybrid open access**

- Hybrid journals include a mix of open access articles and articles available to those with a journal subscription.
- Hybrid journals offer authors the option to publish their articles open access. With this option, authors usually pay an article processing charge (APC). **著者がAPCを支払った論文だけがオープンアクセス（購読契約が必要）**
- For articles published under a Creative Commons licence, readers can re-use the work under the terms of the applicable licence.

- **'Read and Publish' transformative agreements**

- OUP has agreements with many institutions to provide access to OUP journals for faculty and students and provide a limited number of APCs for each institution. **機関単位で、購読と出版（APC支払）の包括契約が可能**

- **Green open access and self-archiving**

- OUP has self-archiving policies that permit authors to take advantage of green open access by depositing their accepted manuscript (i.e. the post-acceptance version, before copyediting) into a non-commercial repository. **著者は機関リポジトリで自著論文を公開してよい**



OUP's options for publishing open access in journals include:

• Fully open access

- Article publishing full OA in journals. All articles in the journal are publicly available.
全論文がオープンアクセス（購読契約が不要）

• Hybrid open access

- Hybrid journals include a mix of open access and subscription.
- Hybrid journals offer authors the option to publish their articles open access, usually for an article processing charge (APC).
著者がAPCを支払った論文だけがオープンアクセス
- For articles published under a Creative Commons licence, readers can access the article under the terms of the applicable licence.

著者が選択

• 'Read and Publish' transformative agreements

- OUP has agreements with many institutions to provide access to OUP journals for faculty and students and provide a limited number of APCs for their authors.
機関単位で、購読と出版（APC支払）の両方

• Green open access and self-archiving

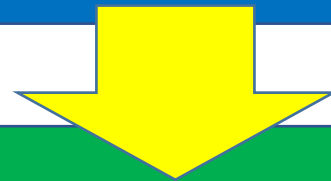
- OUP has self-archiving policies that permit authors to deposit their accepted manuscript (i.e. the post-accepted version) in their institutional repository.
著者は機関リポジトリで自著論文を公開

機関が支援

基本方針への大学・大学図書館の対応

- 研究者が、受給した競争的研究費のルールを無理なく円滑に履行できる環境の整備

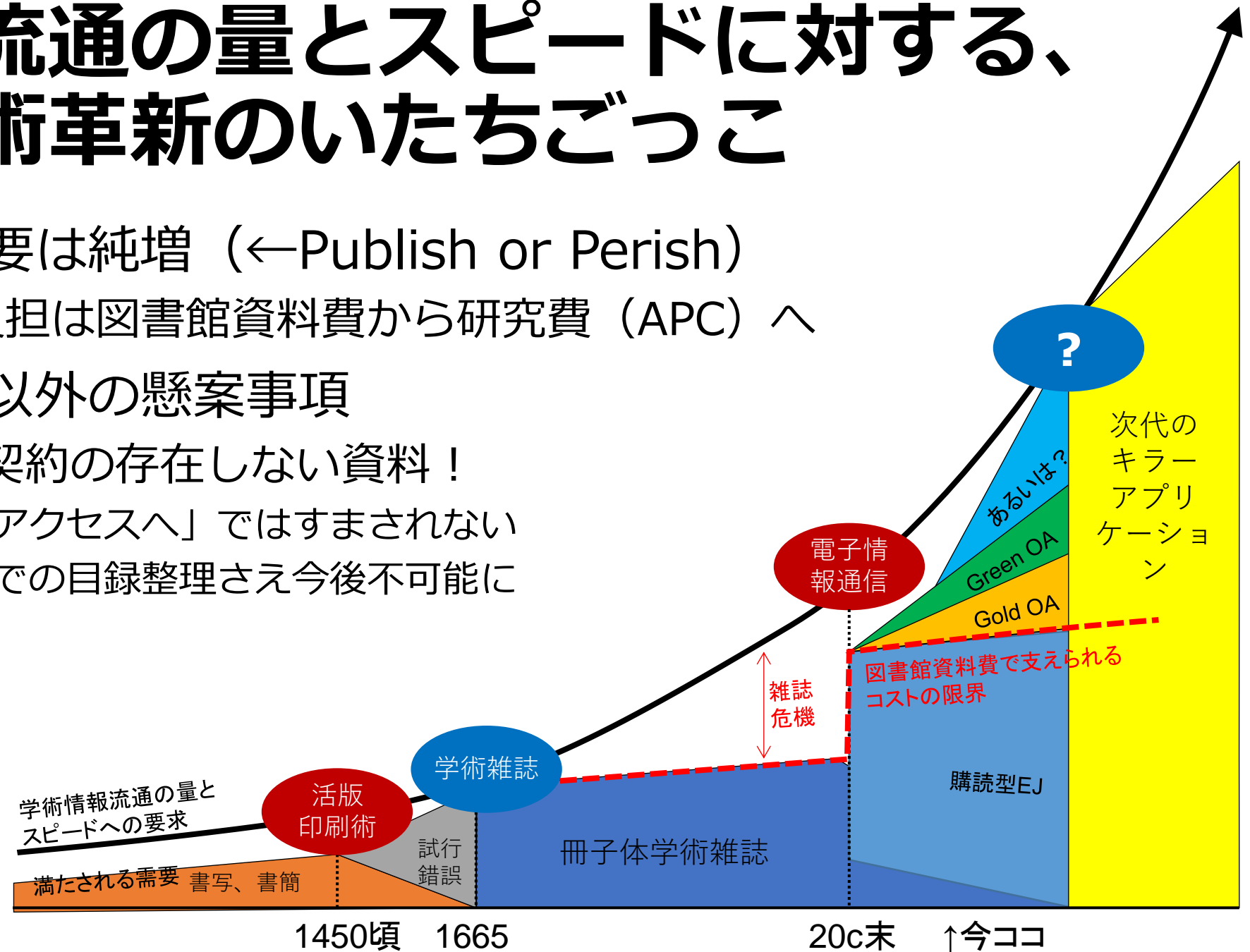
どのように具体的ルール化がなされるかをウォッチ



1. 基本方針、競争的研究費のルールの中構成員の理解促進
2. 機関リポジトリの運営、わかりやすい論文公開手順
3. APC負担への配慮、合理的な包括契約（⇔財政的制約）

学術情報流通の量とスピードに対する、 需要と技術革新のいたちごっこ

- 論文出版の需要は純増 (←Publish or Perish)
 - 増分コスト負担は図書館資料費から研究費 (APC) へ
- コストまわり以外の懸案事項
 - OA誌 = 購読契約の存在しない資料！
 - 「所蔵からアクセスへ」ではすまされない
 - 契約ベースでの目録整理さえ今後不可能に



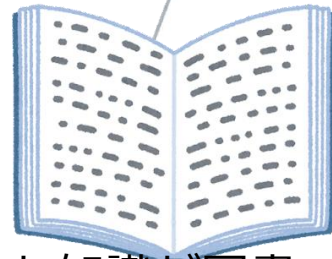
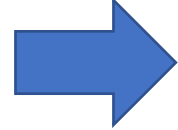
よりリアルタイムで、より広汎な交流へ



Scuola di Atene
(Raffaello Sanzio da Urbino)
賢者が学堂に集まることで、
学术交流が完結する理想郷

印刷術に対するキラーア
プリケーションとしての
学術雑誌の誕生 (1665)

世界の拡大



生み出された知識が図書、
論文等の形に**パッケージ**
ングされ世界に流通



印刷術
(15世紀)

電子情報通信を活用した
新たなコミュニケーション
手法への試行錯誤



パッケージングを前提とし
ない**オンライン・リアルタ**
イムコミュニケーションへ



電子情報通信
(20世紀)



リソース配分の構造的課題

※話者イメージ

• 研究上の重要性	電子資料	紙
• 学習上の重要性	電子資料	紙
• 予算規模	電子資料	紙
• 人的・空間リソース	電子資料	紙

蔵書（過去の知識の巨大な蓄積）と、
それにまつわる**膨大な現業**（装備、貸出、
利用者管理、閲覧環境整備、、、）



合コン女子 (33) の企業分析【3】

41万回視聴・6年前

♀ フラン大学就職チャンネル

動画投稿は毎週火曜日と金曜日の17時。【このチャンネルの動画】 就活、転職、労働、ブラック企業、ビジネス、大学...

2000-

1934
1945
1960
1970
1980
1990
2000
2010
2020



本業喪失の危機から 「第二の創業」へ

創業以来の最大の危機に対して、事業構造の転換を決断しました。

この頃から、富士フィルムは本業喪失の危機に直面。デジタル化の急速な進展に伴い、主力事業だった写真フィルムの需要が2000年をピークに下降に転じ、2010年にはピーク時の10分の1以下まで落ち込みました。

危機的な状況において富士フィルムは、「富士フィルムという会社を21世紀を通してリーディングカンパニーとして存続させる」という目標を掲げ、「第二の創業」に着手しました。

紙出版時代の学術知識

分散

知識アクセスに
独特のノウハウ

他館所蔵

他館所蔵

出版情報

事項調査

論文

図書

図書

情報リテラシー教育

免疫抑制剤/TH and AB=Y
(SH=毒性・副作用, 化学的誘発, 有害作用 or 副作用/TI)

論文

図書

〇〇大学
附属図書館

所在調査

出版情報

選書

論文

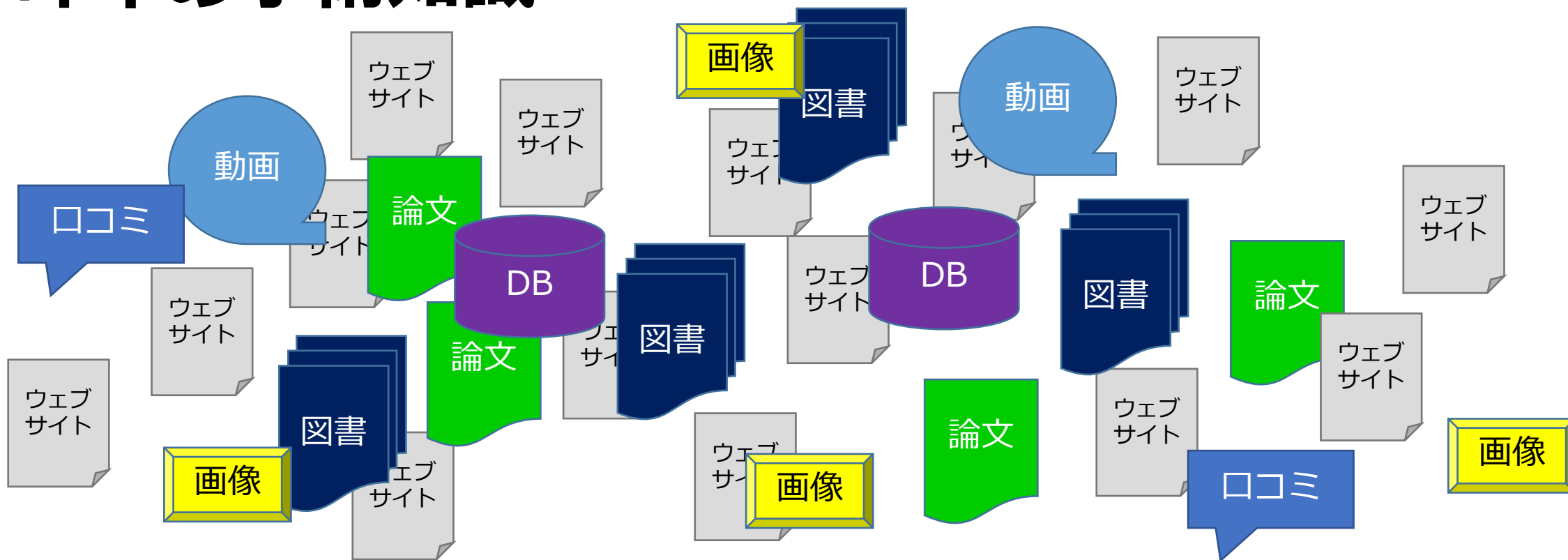
図書

論文

他館所蔵

目録所在情報サービス+ILL/DD

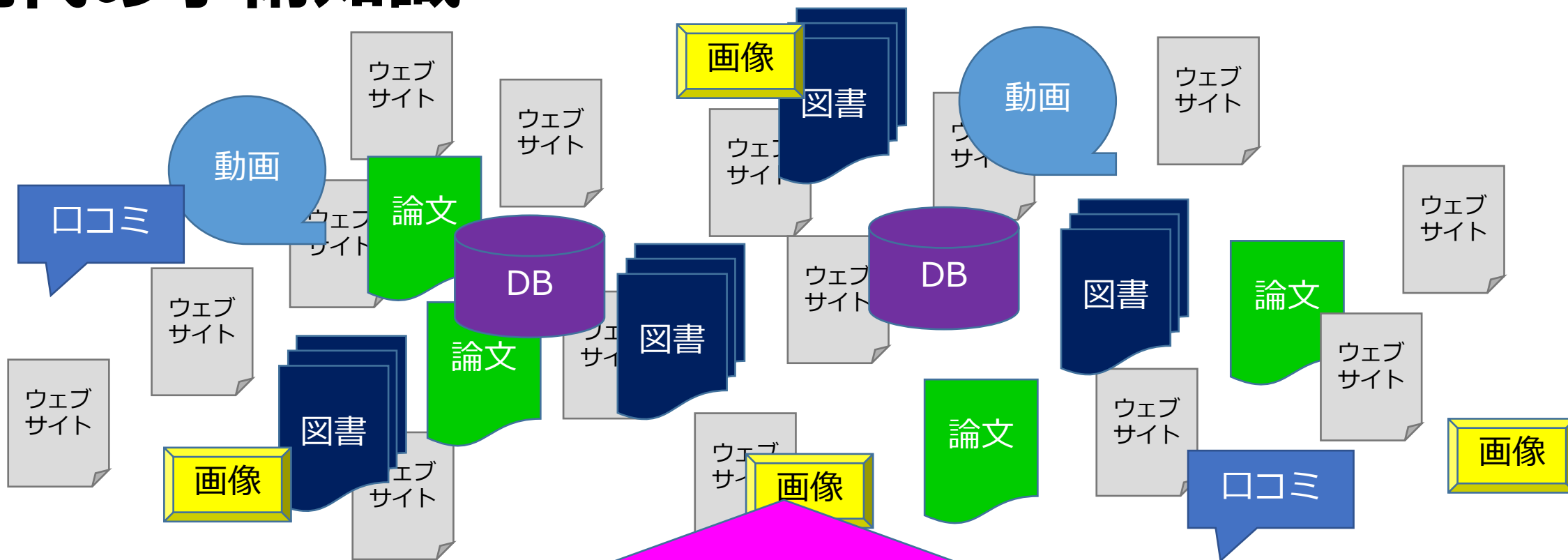
一昨年の学術知識



Google/Amazon/SNS、 、 、

Yahoo!知恵袋、教えて!Goo

現代の学術知識



自然言語による、
世界の知識への
直接アクセス

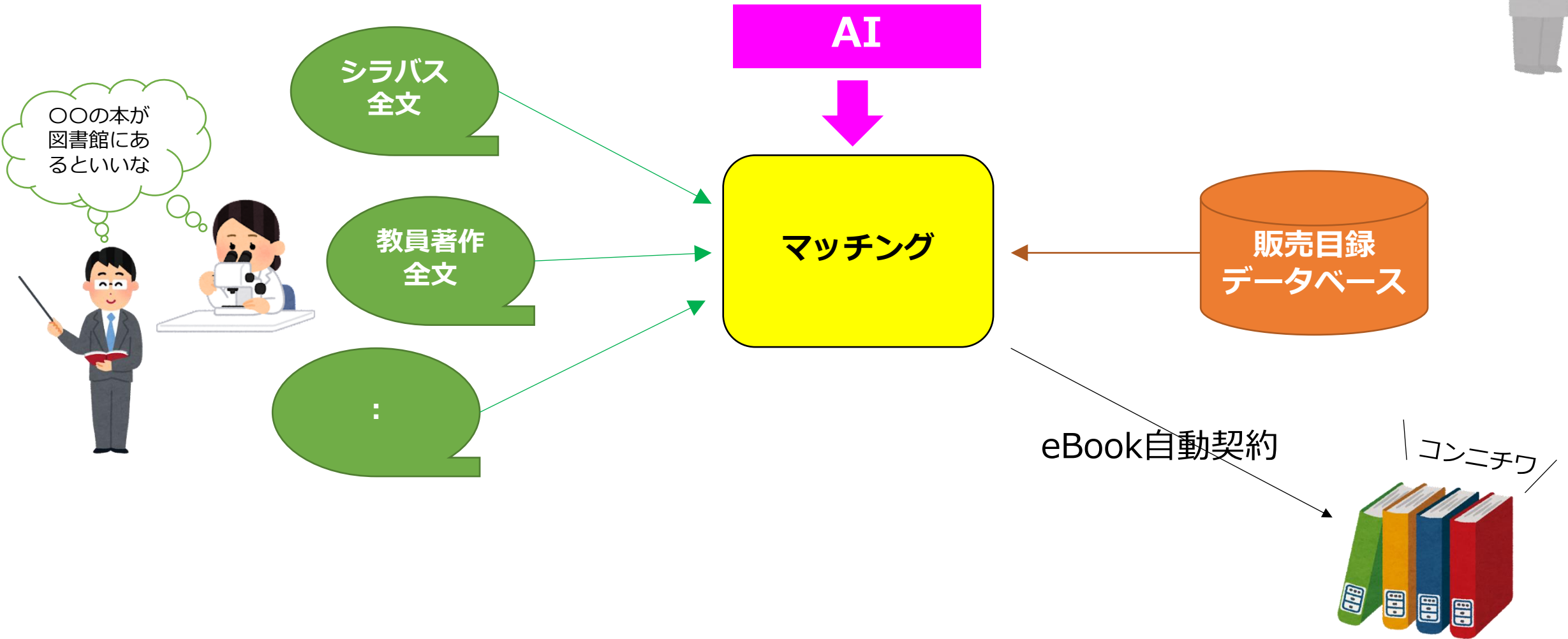
別の研修会席上の話題

人員減少の中、
図書館が守り、
残していくべき
業務は何か

選書
参考調査
：

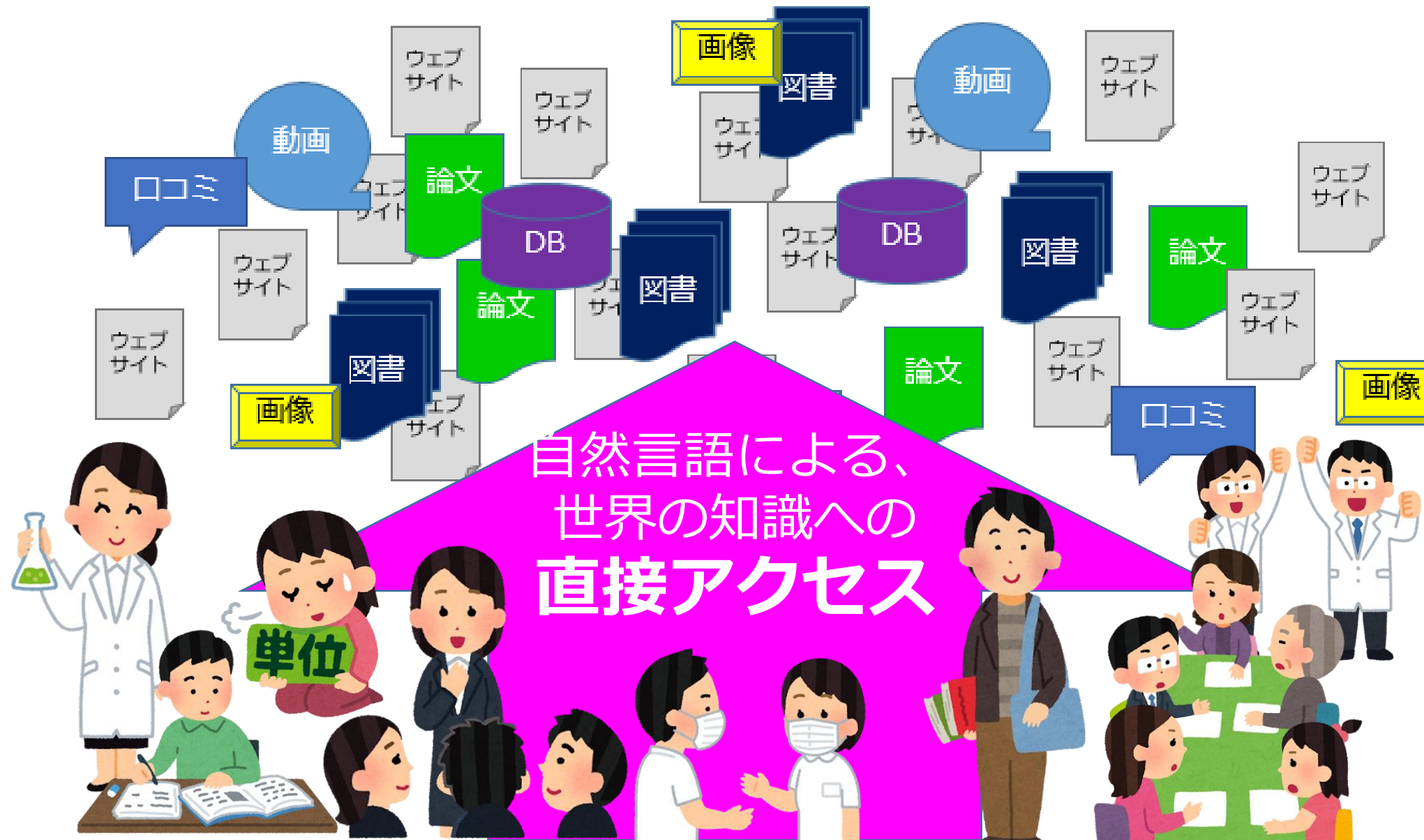
デジタルトランスフォー
メーション（DX）により、
新しい技術を取り入れて、
業務をどのように高度化
していくべきか

選書？



参考調査？

AIを取り入れて、
より高度化を……



オープンサイエンス時代における大学図書館

- 選書業務をいつ廃止しますか？
- 参考調査業務をいつ廃止しますか？
- そこまでのステップは？
- ほかに廃止していい業務はありませんか？
- 情報リテラシー？ それこそ自然言語による知識へのアクセスによって乗り越えられませんか？
- 司書資格をいつ廃止しますか？

これらを廃止して、浮いた人員で何をしますか？